

環境調査における河川水の測定について

1 監視委員会での議論の経緯

令和4年第2回(8/22)中園議事録

河川水調査は埋立地に必要な基準ではないため、調査を終了してもよいのではないかと昨年から議論している。大腸菌群数が参考基準値を超えているが、原因は自然由来であり、処分場の影響ではないと考えられるためである。

処分場の処理水が河川に放流される地点をはさんで、その上流と下流で調査を行っている。これは、処分場の処理水によって河川が何らかの影響を受けているかを確認するための調査であるが、この調査を今後も継続すべきか否かが論点となっている。終了すべきという意見の理由は、処理水の調査を行えば充分である。大腸菌群数等の測定値の変動は(処分場の影響ではなく)自然由来である、など。河川水調査の継続について、メリットは周辺住民の安心につながる、デメリットは処分場の影響に関する調査としての意義はほとんどない。地元委員から調査の中止に対する肯定的意見があったが、この会議で即中止を決定するのではなく、地域の理解を得られるよう丁寧に進めていきたい。

事務局においては、これまでのデータ整理等を行って、原因の特定は無理としても、河川水の大腸菌群数と処分場には因果関係がないことが証明できるような資料を作成願いたい。それによって、地域の理解を得た上で河川水調査を終了する、というプロセスを進めることを提案したい。

2 処理水(放流水)と河川の大腸菌群数

過去5年間の測定値は表のとおりです。(ただし、河川水と処理水の測定方法、単位は異なっているため、処理水は個/cm³を100倍した数値です。)

旭川市廃棄物処分場について、処理水放流地点を挟んだ上流と下流で調査を行っています。下流の値が上流よりも高い傾向がありますが、処理水は河川水より低い値です。

中園廃棄物最終処分場については、処理水の値は下流の値と同等か高い値となっていますが、処理水に大腸菌群数が検出されていない場合でも、河川の大腸菌群数が高いことから、処分場処理水との関連性は見られない結果となっています。

3 今後の測定について

これらの調査結果から、両河川における大腸菌群数は処分場に因るものではなく、周辺の自然や環境に由来するものと判断できます。また、中園廃棄物最終処分場の処理水は排水基準3,000個/cm³の10分の1以下であり、両処分場とも有害物質は検出されていません。

以上のことを地域の皆様にご説明させていただき、御理解をいただいた上で、来年度以降の環境調査を中止したいと考えております。

図1 採水地点(旭川市廃棄物処分場)

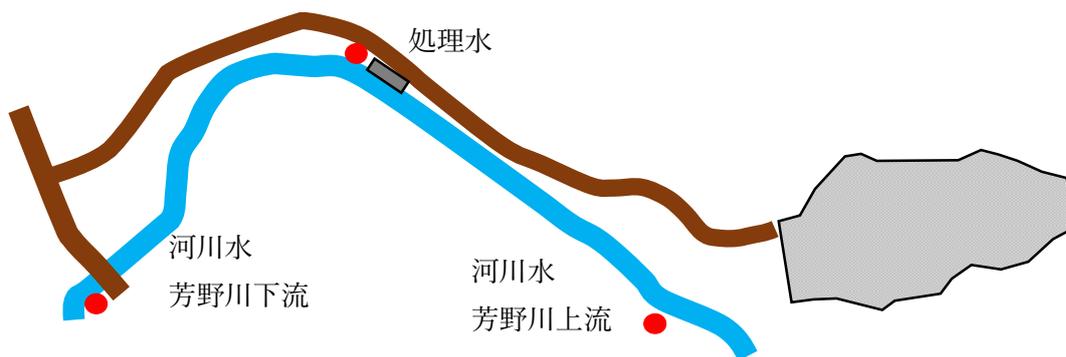


図2 採水地点(中園廃棄物最終処分場)



大腸菌群数の比較

(旭川市廃棄物処分場)

	芳野川上流(MPN/100mL)	処理水(個/100cm ³)	芳野川下流(MPN/100mL)
令和3年度	3,300	200	33,000
令和2年度	22,000	3,900	1,700
令和元年度	4,900	0	49,000
平成30年度	49	1,200	1,100
平成29年度	7,000	0	220,000

(中園廃棄物最終処分場)

	処理水(個/100cm ³)	合流点下流 50m(MPN/100mL)
令和3年度	25,000	23,000
令和2年度	24,000	2,700
令和元年度	8,800	790
平成30年度	2,100	790
平成29年度	0	1,700